

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

佐那子は射に至る準備をすべて終えた。あとは『離れ』の瞬間を待つだけである。

離れとは、右手の人差し指と中指と薬指を開き、親指を弦から離す動作をさす。単純な行為にも思えるが、この離れに弓道の奥深さが集約されていた。[＊]鼎蔵も離れを他のどの技術より重視している。

どれほどの弓の達人であろうと、放つ直前の矢は先端が小刻みに揺れている。ほとんど身体を伸ばしきって引く和弓の構造上、これは避けられない現象だった。そして矢の揺れはどれほどかすかに見えても、その角度を計測すれば、的に当たる数値と外れる数値を行き来している。ゆえに離れを誤れば、その射は瞬時に損なわれる。

離れを成功させるには、なにより集中力が大切だった。離れに最適なタイミングは一瞬しかない。その正確な見極めは、雑念を蔓延^{はびこ}させた心では到底覚束ない。^{おぼつか}

ただし、離れは集中力だけで為し遂げられるものでもなかった。

「今だ！」

離れに最適な瞬間を見出したとき、そんなことを考えたとしたら、どうなるか。矢が放たれるのはその直後となり、離れのタイミングが最適ではなくなってしまう。

「離れを考えてはいけない。」

それが鼎蔵の教えだったが、佐那子は弓の稽古^{けいこ}を始めてからじつに二年間も、正しい離れを行うことができなかった。

鼎蔵から離れの指導を受けた佐那子は、最初からつまずいた。考えるな、と言われたところで、なにをどうすれば考えずにいられるのか。いくら努力したところで、考えない、ということを考えることになる。だいいち頭で考えない限り、親指を包む三本の指が開くわけがない。ヒトの身体はそういうふうになっている。

そういった疑問を伝えると、鼎蔵はこんなことを言った。

「笹の葉に積もった雪が突如として滑り落ちるように、矢を射なさい。」たとえ話をするので、子供にも分かりやすくしたつもりなのだろう。けれど佐那子の離れは改善しなかった。

「水滴が次第に大きくなってついに落下するように、矢を射なさい。」

そんなふうにも鼎蔵は言ったが、佐那子の離れは改善しなかった。

「熟した果実が気づけばはじけているように、矢を射なさい。」

そんなふうにも鼎蔵は言ったが、佐那子の離れは改善しなかった。

鼎蔵の言いたいことは、自然な感じ、ということだろう。その解釈には佐那子は自信を持っていた。けれどそれを実践するには、自然な感じ、を意識する必要がある。意識した、自然。矛盾している。と思えなかった。

離れについて悩み抜いた佐那子は、やがてひとつの答えにたどり着いた。弓を引き絞ったあと、親指を包む三本の指のうちの一本を慎重に伸

ばしてゆく。このとき考えるのは指を伸ばすことだけで、弓のことは意識しない。すると指の支えを減らされ不安定になった親指を、弦が弾き飛ばす瞬間が自然と訪れる。矢は勢いよく放たれる。

うまくできた、と佐那子は思った。早めの離れは人差し指。遅めの離れは薬指。基本の離れは中指。伸ばす指を変えることで、射のタイミングの調節も可能にした。けれどその射法を検分した鼎蔵は、首を横に振った。不正解以前の不正である、と孫に厳しい言葉を浴びせた。⁽²⁾ 佐那子は進むべき方向を見失っていた。

そんなある日、佐那子の父が友人の息子を道場に連れてきた。逸平である。鼎蔵は練習用の的である巻藁を二つ並べて設置すると、逸平に弓懸をはめさせ、弓と矢を持たせた。自ら射を実演したあと、とりあえず逸平に弓を引かせるのか、と佐那子は推測したが、それは誤りだった。逸平と歳の近い佐那子に対し、手本を見せろ、と鼎蔵は言ったのである。

佐那子と逸平がそれぞれ別の巻藁の前に立つ。常に佐那子が先行する恰好で、弓に矢をつがえ、両腕を高く掲げ、さらに左右に一杯に開いて、射の準備を完了させた。初めて弓に触る逸平の動きは、当たり前だが経験者の佐那子に比べて稚拙であり、不恰好だった。

「離せ。」

背後に立つ鼎蔵が告げた。満足に離れをこなせない現状で、自分が手本になるにはどうすればよいのか。佐那子は悩んだ。その隙をつくよう

に、逸平が鼎蔵の言葉を素直に実行した。

「……え？」

素晴らしい離れだった。弦を解き放った逸平の右腕は、余計な力が入っていないということなのか、衝撃に逆らうことなくしなやかに揺れた。身体は微動だにせず安定している。

矢はまっすぐ巻藁に突き立っていた。

⁽³⁾ 「どうやったの！」

自らの射を中断して、佐那子はたずねた。逸平は無言だった。

なにも語ろうとしない逸平に、佐那子はさらに問いかけようとはしなかった。考えずにただ離した。それが答えと察せざるを得ない純朴さが、逸平の生真面目な表情の下に透けて見えたのである。

佐那子は馬鹿らしくなった。⁽⁴⁾ 離れについて悩むのはやめようと思った。ただし鼎蔵の教えが実現できることは、逸平によって見事に示された。離れの習得を諦めようとはせずに、その後の佐那子は無心に弓を引き続けた。

ある日のこと、佐那子の背後を通った鼎蔵が突然拍手をした。

「いいぞ、いいぞ。」

そう言った。佐那子は何のことかわからなかったが、思い返してみると、直前の射の最中、自分はなにも考えずにいたようである。それでいて、離れを正しく行っていた。指を開こうと意識したつもりはない。なのに指は開き、矢は的の中心へ放たれたのである。

——その理由は、今でもわからないけど。

離れの瞬間を待つ佐那子は、いつもこうして初成功時の記憶をよみがえらせる。そのときの感覚の再現を頭のどこかで期待するためだが、途中で回想を断ち切らない限り、離れは必ず失敗する。

——集中、集中。

佐那子は自分を戒めた。

（松樹剛史「熟してはじける果実のように」による）

〔注〕 鼎蔵ていざう——佐那子の祖父であり、弓道の師範。

巻藁まきわら——弓の練習の的に使用する、わらを巻き束ねたもの。

弓懸ゆがけ——弓を射るときに使用する革の手袋。